兵庫教育大学　研究紀要　第22巻　2002年3月　pp.37－40

高校生の学校生活適応感に関する研究
－高校生活適応感尺度作成の試み－

A study of students' adjustment to their high school：Development of the index of students adjustment to hjgh school life

浅川潔司*　森井洋子**　古川雅文***　上地安昭****
Kiyoshi ASAKAWA　Yoko MORII　Masafumi KOGAWA　Yasuaki UECHI

The Present study was proposed to develop the Index of Student's Adjustment to School Life (ISAS). 377 high school students took part in the study. Another 91 students participated in data collection for examination of reliability. 65 items of the original ISAS were chosen from some researches previously done and from statement described by high school teachers and students. To examine a validity of ISAS, School Morale Test (SMT ; Matsuyama et al. 1984) was used. The main findings as follows：

1）Factor Analysis revealed that the ISAS was consist of 6 subscales ; attitude toward extra school activity, relation to family members, interpersonal relation to teachers, academic activity, interpersonal relation to friends and self-affirmation.

2）As to reliability, test-retest correlations on ISAS were significant, and Cronbach α on overall scale and each subscale were more than. 75

3）Correlation coefficients between each subscale of ISAS and overall scores of SMT were significant, except for self-affirmation.

Those findings suggest that the ISAS is to be of valid and reliable for the measurement of school adjustment in high school students.

キーワード：高校生　学校適応　測定尺度　信頼性　妥当性
Key words：High school students, school adjustment, school adjustment scale, reliability, validity

問題

さまざまな理由で不登校を示すに至るとか、学力の不振や対人関係の不調から学業を中断したり、退学を余儀なくされるなど、高校生活に不適応を示す生徒は決して少なくない。

不登校の実態調査を実施した森田（1991）は、子どもたちの約70％が登校回避感情を抱いているとの結果を報告している。現在の高校生においてもこのような傾向があるのであれば、表面上は何事もなく登校している生徒たちの中にも、高校生活への不適応感や回避感情を潜在的に抱いているものが相当数にのぼることが予想される。

高校生の学校生活適応のための発達支援という観点からすれば、不適応感を形成している高校生が少なくないことを教師や保護者が認識し、生徒の発する内面世界の信号を敏感に把握できるならば、彼らを支えるためになされる対処もより適切さを増すと思われる。

ところで、これまで、高校生の学校への適応や不適応といった問題についての研究は、精神病理的あるいは臨床心理的な側面から検討されることが優勢であった。換言するならば、登校回避感情を多数の生徒が抱くとされるが、彼らに対して予防的な関与が積極的になされてきたのではない。高校生への対処は、顕現化した不適応状態に対する専門的な治療的かかわりが多数を占めているといっても過言ではない。

表面化しない段階でのストレス症状やネガティブな高校生活感情、あるいは登校回避感情などを高校生が感じやすく、常にそれらが顕在化する可能性がつきまとっているのであれば、このような状態に低減を図る予防的な対応はまた、心理治療等と同等の効果を有すると思われる。しかしながら、このような観点からなされた研究は多いとはいえない。

その理由のひとつには、中学生や高校生の学校適応の測定が可能でなおかつ簡便に使用できる尺度が少ないこともあげられる。

わが国の場合、児童や生徒の学校環境に対する適応度を測定できる尺度には、松山・倉智（1967）や松山・倉智・数藤・宮崎（1984）による小、中、高校生用のスクール・モラール・テスト（以下SMTとする）がある。松

＊兵庫教育大学第１部、（教育臨床講座）　＊＊兵庫県立三田西陵高等学校
＊＊＊　兵庫教育大学　学校教育研究センター　＊＊＊＊兵庫教育大学第１部（生徒指導講座）
平成13年10月22日受理

山ら（1984）の見解によると、スクール・モラールとは、本来、児童・生徒の学校や学級への帰属感や安定感に基づいて示される、学校内での諸活動に対する意欲的で積極的な心理状態である。

このように考えられるスクール・モラールが高い水準にあると見なされる生徒は、そうでない生徒と比べて肯定的な学校生活をおくっている可能性が強い。SMTには、適応と密接に関連する指標であるといえる。

一方、より直接的に高校生の学校に対する適応感の測定を目指した内藤・浅川・高瀬・古川・小泉（1986）は、信頼性と妥当性を備え、簡便で反復的な使用に耐えうる高校生用の学校環境適応尺度を開発している。この尺度の項目を設定するにあたっては、高校に在籍する2年生が対象となった。これらの被調査者は高校によりよく適応していると認知される生徒を思い浮かべ、彼らに備わる観察可能な特徴を自由に記述するよう求められた。その後、この自由記述がKJ法によって整理され、原尺度が構成されたのであった。

この原尺度に対する高校生の反応を因子分析したところ、6因子が抽出された。すなわち、学習意欲・友人関係・進路意識・教師関係・規則への態度・特別活動への態度の6つである。

自己報告形式のこの尺度は、あえて学校適応を固定的に捉えるのではなく、各生徒が自分と高校の関係性の中で主観的に感じた様態を測定するようになっている。そのためもあって、適応尺度とは命名されず、より回答者の主観的認知の様相が濃い適応感という用語が尺度名に使用されたのであった。

なお、再テスト法によってこの尺度の時期的安定性と内的整合性が検討されたが、両者とも信頼にたる水準であり、教師評定や生徒相互評定による学校適応度と当該尺度の得点との相関値、そしてSMTの得点との相関値はいずれも、基準関連妥当性を保証していた。

内藤ら（1986）による高校生用学校環境適応感尺度は学校内の生活に焦点化された高校への適応感を測定する尺度である。その点で、高校生の生活場面を限定的に捉えているとも考えられる。高校生の生活場面には学校や家庭のほかにも近隣の地域社会などが含まれる。高校生活にどのように適応しているかは、このような他の生活場面での適応感と切り離して考えるのは、妥当なことではない。

そこで、本研究では、高校生の学校生活には関わる種々の測定尺度を参考にし、また、高校生や高校教員の意見を参考にして、新たに高校生が学校生活を送る際に認知する適応感を測定可能な尺度を開発することを主たる目的とした。

方法

被調査者：兵庫県下のX公立高校の2年生377名（男子生徒：178名、女子生徒：199名）が被調査者として本研究に参加した。その内3学級91名はSMTと高校生活適応感尺度に回答が求められた。他の学級の生徒は、高校生活適応感尺度のみが実施された。また、この被調査者群とは異なる県立Y高校の1年生2クラス（男子35名、女子45名）が再テスト法による時期的安定性の確認のための被調査者となった。

質問紙：高校生活適応感原尺度は、62項目から構成されていた。これらの項目の抽出にあたっては、内藤ら（1986）・大野（1984）・片野（1990）・吉田（1993）などの研究において使用された充実感や学校適応感、そして生活感情が参考にされた。

また、兵庫県下の公立高校2校の教員と生徒を対象に予備的な調査が実施された。そこでは、学校生活に適応していると考えられる生徒の特徴を自由記述で示すよう求められた。この手順で得られた資料をもとに、質問項目をカード化して整えた後に、5名の現職教員である大学院生がKJ法的な手法によって整理し、これに上述した各尺度から抽出した項目を加えて原尺度が構成された。

なお、この尺度に対する反応は5件法によって求められた。

本研究では、高校生用生活適応感尺度のほかに、この尺度の基準関連妥当性を検討する目的で、松山ら（1984）によるSMTが質問票に綴じこまれて用いられた。このSMTは本来モラールの測定に適した尺度であるが、モラールの高さは学校内外での定的態度と密接に関係すると考えたため使用した。なお、この尺度は6つの下位尺度から構成されていた。すなわち、「学校への関心」・「級友との関係」・「学習への意欲」・「教師への態度」・「家族関係の認知」・「進路への見通し」の6つである。

調査の手続きおよび調査時期：高校生用生活適応感原尺度とSMTからなる小冊子が作成されX高校において各クラスを単位に、集団場面で配布され、あらかじめ説明を受けた担任教師の教示のもとに実施された。各クラスとも、共通の教示文によって、1999年3月にこの調査がなされたが、回答済みの冊子は回答終了直後に回収された。

時期的安定性を検討するための調査は、Y高校1年生を対象に、X高校での調査手続きを踏襲して、翌年6～7月に2週間の間隔をあけて実施された。

結果および考察

因子分析による分析結果

高校生活適応感原尺度の因子構造等を明らかにする目的で、各項目間の相関行列を基に、因子分析（主因子解－バリマックス回転）が実施された。その結果、1.0以上の固有値とその変動を考慮しながら.40以上の負荷

量を持つ項目からなる解釈可能な6因子が抽出された。

この内容については、Table 1に示すとおりである。各々の因子は、含まれる項目の内容を考慮して、それぞれ部活動への意欲（第1因子）、家族関係（第2因子）、教師との関係（第3因子）、学業への意欲（第4因子）、自己肯定感（第5因子）および友人関係（第6因子）と命名された。

内藤ら（1987）による高校生用学校適応感尺度と本尺度を比較してみると、部活動、学業、教師との関係、友人関係といった下位尺度は双方に含まれている。また、進路意識は独立した因子ではなく、「学業への意欲」に統合されていた。しかし、内藤ら（1987）の下位尺度に見られた「規則に対する態度」は、本尺度の下位尺度としては検出されなかった。他方、本尺度で検出された自己肯定感と家族関係は内藤ら（1987）の学校環境適応感尺度には含まれていなかった。

TABLE1 1　高校生活適応感尺度の因子分析結果

	項　目	F1	F2	F3	F4	F5	F6
F1	1 私は、部活動に意欲的に取り組んでいる。	.94					
	2 私は、部活動に自主的に参加している。	.91					
	3 部活をやることで、何かをやり遂げていると言う実感が得られる。	.89					
	4 部活があるから学校が楽しい。	.88					
	5 私は、部活動に参加することが楽しい。	.88					
	6 私は、部活動を通じて成長していると感じている。	.83					
	7 私は、部活動や趣味と勉強の両立ができるよう努力している。	.57					
F2	8 親は良き理解者だ。		.74				
	9 私は親から信用されていると思う。		.69				
	10 親を尊敬している。		.68				
	11 私は、家族に受け容れられていると思う。		.63				
	12 私は、家族とよく話をする。		.60				
	13 私は、自分の思っていることを家族にきちんと伝える。		.60				
	14 家の家族はばらばらだ。		.52				
	15 家で落ち着ける。		.42				
F3	16 私は、先生に親しみや暖かさを感じる。			.72			
	17 私は、この学校で相談できる先生がいる。			.63			
	18 私は、この学校で気軽に話せる先生がいる。			.61			
	19 私は、この学校に好きな先生がいる。			.58			
	20 私は、この学校の先生を信頼している。			.47			
	21 先生は私に良く声をかけてくれる。			.46			
	22 私は、先生に話しかけづらい感じがする。			.44			
F4	23 私は勉強に積極的である。				.68		
	24 私は、予習や復習を毎日できるよう努力している。				.66		
	25 私は自分にあった進路を考えている。				.54		
	26 私は自分の進路のことを真剣に考えている。				.52		
	27 私は勉強が楽しいと思う。				.50		
	28 私には、夢・目標がある。				.46		
	29 私は自分の将来に希望をもっている。				.45		
	30 私は授業を真面目に受けている。				.45		
	31 遊ぶときは遊び、勉強するときは勉強するというけじめがついている。				.45		
F5	32 自分がなさけなくて嫌になる。					.70	
	33 今の自分に自信が持てない。					.63	
	34 私はちょっとしたことですぐくよくよする。					.63	
	35 何をしても失敗しそうで、心配だ。					.61	
	36 友達からどう思われているか気になり、不安である。					.55	
	37 いつも緊張していてリラックスできない。					.54	
	38 わけもなく不安になることがある。					.47	
	39 自分自身を好きだと思える。					.45	
F6	40 私には悩みを聞いてくれる友人がいる。						.69
	41 私には何でも話せる親しい友人がいる。						.63
	42 私は、学校へ行くのが楽しい。						.50
	43 友達がいるから学校が楽しい。						.50
	44 体育祭や文化祭などの行事は楽しみだ。						.45
	45 私は、友人からいろいろとうち明けられて相談される。						.44
	平方和	7.20	3.64	2.81	2.46	2.02	1.87
	寄与率	20.02	10.11	7.81	6.83	5.61	5.19

TABL 2　スクールモラールテスト（S.M.T）との相関値

	部活動	家族	教師	学業	自己肯定	友人関係	合計
学校への関心	.488**	.400**	.599**	.384**	.123	.669**	.707**
級友との関係	.228	.452**	.277**	.197	.044	.443**	.471**
学習への意欲	.199	.503**	.299**	.592**	.108	.231*	.547**
教師への態度	.220	.356**	.615**	.277**	.035	.338**	.545**
進路への見通し	.329*	.346**	.455**	.430**	.089	.523**	.601**
家族との関係	.131	.769**	.294**	.279**	.109	.331**	.589**
ＳＭＴ合計	.360**	.635**	.565**	.487**	.116	.565**	.778**

N=91　　** p <.01　　* p <.05

信頼性の検討

2週間の間隔をおいて実施された再テスト法に基づく高校生活適応感尺度得点を用いて算出されたピアソンの相関係数はr=.87であった。さらに、下位尺度毎に同様の相関係数を検討したところ、いずれも、r=.76以上の相関値が算出された。これらの事実から、この高校生活適応感原尺度は時期的安定性を備えていると考えられる。

次に当尺度の内的整合性を検討するために、尺度全体と各下位尺度でCrombachのα係数が算出された。その結果によれば、全体では、α=.86であった。それぞれの下位尺度毎にみると、「部活動」（α=.93）、「家族関係」（α=.82）、「教師との関係」（α=.78）、「学業への意欲」（α=.77）、「自己肯定感」（α=.75）および「友人関係」（α=.78）の結果が得られた。

これらの結果から、本尺度は短期間の時間的要因による変動が少なく安定した尺度であること、そして信頼できる水準の内的整合性を有することが明らかになった。

妥当性の検討

本尺度の併存的妥当性の検討にあたっては、スクールモラールテストが使用された。SMT得点と高校生活適応感尺度の得点との相関係数（N=91）を算出し整理したものがTable 2である。

この表からも明らかであるが、全体得点では両尺度間に強い相関関係があることがわかる。自己肯定感を除く他の下位尺度の得点とSMT全体得点の間にも相関関係が確認された。

自己肯定感に関しては、SMTのどの下位尺度とも相関関係にあるとはいえなかった。この点からすれば、学校生活の適応感を測定しうるのであるかとの懸念も生まれよう。しかしながら、青年期の自己理解の発達という観点からすれば、自己肯定感は当該発達期における環境適応を考える上で重要な側面になる。

たとえば、青年期の顕著に発達する自律性の探求に言及したDamon（1990）は、自己同一性の形成や統合に先立って、両親からの分化と自身の独自性の実践を経て、新たな自律的な自己感覚にもとづく親との和解、といった過程を個人はたどるという。

そして、自己と自己の行動を受容することや、自己のイメージと連合した安心感と適合性は、心理社会的に良好な状態であるとされる（Damon、1990）。

このような観点からみれば、自己効力感は青年期の個人の生活世界への適応を表すひとつの指標になると思われる。

まとめ

信頼性や妥当性に関する分析の結果から、本研究で開発された高校生活適応感尺度は、学校を中心とする高校生の生活世界への適応感が測定可能な尺度と考えられる。

引用文献

・Damon, W. 1990 Social and Personality Development. 山本多喜司（翻訳）社会性と人格の発達心理学 北大路書房

・片野智治　1990　高校生の「充実感」「人間関係」両尺度の妥当性の検討カウンセリング研究　Vol. 23, №2, Pp.179－190.

・松山安雄・倉智佐一　1969　学級におけるスクール・モラールに関する研究（第1報）大阪教育大学紀要　第18巻　Pp.19－35

・松山安雄・倉智佐一・数藤　茂・宮崎日出邦　1984　中学校用・高等学校用SMT手引き　日本文化科学社

・森田洋司　1991　「不登校」現象の社会学　学文社

・内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉令三　1986　高校生用学校環境適応感尺度作成の試み　兵庫教育大学研究紀要　7巻　Pp.135－146.

・大野　久　1984　現代青年の充実感に関する研究－現代日本青年の心情モデルについての検討－　教育心理学研究　32巻　Pp.100－109.

・吉田勝也　1998　高校生における生きがい尺度と自己愛人格傾向の関連　－自我同一性の視点から－　思春期学　Vol. 16, №4, Pp.531－538.

謝辞：本研究にご協力いただきました高校生および教職員の皆様に著者一同意心から謝意を表します。